

F-25 家事労働に対する意識について — 夫と主婦の意識差異をめぐって —
ノートルダム清心女大 中山裕美子

目的 家庭生活において行なわれる家事労働は、家庭生活を維持し、家族員の幸福を追求する上で、必要不可欠な存在であると考えられる。しかし、実際に家事労働を担当している主体者（主に主婦）や、これを受ける側にある者（主に夫やその他の家族員）が、どのような意識をもっているかは疑問であると思う。

そこで、この家事労働に対する意識として、家事労働に関する分業意識を中心に、夫と主婦の意識差異をあきらかにし、現状把握のうえに、将来のあり方を考えたい。

方法 アンケートによる分析を中心とする。①調査場所：ノートルダム清心女子大学家政学科学生の家庭、および岡山県倉敷市水島の団地住宅 ②調査対象：夫と主婦 ③調査時期：昭和50年6月～7月 ④有効数：夫175名、主婦212名

結果 ①夫側に、家事労働を妻の仕事とみなし、自分の労働と同等に評価する傾向が、かなり高くあらわれている。②主婦側は、家事労働をしても、それは夫と分業に値するものでなく、あくまでも夫に扶養されているという意識が先行している。③家事労働に関する分業意識をみると、夫側の主婦への役割期待が高い。④現在、夫側からの期待ならびに主婦自身が考える「主婦の役割」は、家庭の主人（home manager）として、家庭生活を維持させることにあるとみてもよい。